

親子関係と子どもの社会情緒的発達

講師・遠藤 利彦 氏

京都大学大学院教育学研究科准教授。東京大学大学院教育学研究科併任准教授。専門は発達心理学・感情心理学。主な著書に「喜怒哀楽の起源：情動の進化論・文化論」, 「アタッチメント：生涯にわたる絆」, 「発達心理学の新しいかたち」, 「読む目・読まれる目：視線理解の進化と発達の心理学」他多数。



はじめに

社会情緒的発達の「社会」というのは、心理学からいうと人間関係全般を指している言葉です。子どもの社会情緒的発達といった時には、子どもがどのように人間関係を築いて、その中でどのように感情的なコミュニケーションができるようになっていくのだろうか、ということです。子どもが他の人にくっこうとする愛着は、子どもの社会情緒的発達というところに深く関連すると考えられます。今日は愛着ということ 키워ドにした話になるかと思います。

愛着とは

愛着とは、不安や恐れというような感情を経験した時、誰かにくっついて安心感に浸ろうとすることです。逆にいうと不安や恐れを経験していないと愛着は生まれにくいのです。そして、子どもの不安や恐れに対して、周りの大人がどう対処することができるかが重要で、この安全の感覚が確保されて、初めて子どもの発達は健康な形で進みます。

発達のいうと、小さい子どもは身体的にくっついて安心感に浸れます。しかし、これは徐々に気持ちの上でのくっつきという形に姿を変えていき、こうすれば安心感を得られるという見通しが獲得されるようになっていきます。その見通しというものが持てている状態というのは、我々が健康に生活していることの一つの証になり、これは子どもも大人も同じことなのです。

人間の赤ちゃんは

人間の赤ちゃんは自分自身で食べる能力、身体運動能力、体温維持能力ということに関しても非常に未熟で無力です。だから、人間の赤ちゃんは誰かに保護され誰かにくっついてもらわないといけないところがある。他の生物とは大きく違うところ。また、体重が重く未熟な子どもを育てなければならぬこと、子どもの時代が長いことから人間における養育の負担は際立って大きいといえます。

しかし、人間の赤ちゃんは、全面的に依存しているだけでなく、くっついてもらうための手段に関していうと、非常に巧妙な仕掛けをたくさん持っています。赤ちゃんは意図して「誰か来てよ」と言っているわけではないが、いつの間にか人を

引き寄せてしまう仕組みを備えていて、大人はそれに応じてしまう仕組みを持っています。そういうものを通して、赤ちゃんは周囲の関心を引き、自分の思いがあると見せかけ、他人からそれに応じた関わりを引き出してしまう力を持っているのです。そして大人には、子どもの発達に必要なことをいつの間にかしてしまっているという傾向が備わっているのです。

大人からの働きかけの要素

随 伴 性 赤ちゃんが何かしたという時にタイミングよく応答することです。タイミングの良い応答というのは、自分がそういうことを引き起こしたという自分に対する自信と同時に、タイミングよく応じてくれる他者に対する信頼という意味で重要なことです。

適切報酬性 タイミングよく応じた行動が、赤ちゃんの潜在的な身体状況や心の状態に合致しているかということです。不快な感情の状態を調整されることが大切です。

一 貫 性 その時々赤ちゃんに対する関わりが一貫していることです。子どもにとって大切な見通しがつくために環境そのものが一貫していることです。

映 し 出 し 大人が鏡の役割を果たすということです。大人が赤ちゃんの身体や心の状態を返すことによって、赤ちゃんは自分の感情も理解できるようになっていきます。同時に他の人と自分の感情が共有されるということの経験にもなっていきます。

ここで述べた自分に対する自信や他者に対する信頼、感情の調整や良い行為の強化、自分の感情を自覚すること、他の人と感情を共有することは発達の一番基礎的なものです。赤ちゃんの気持ちを過剰に読み取ってしまうことが、結果的には発達促進的な相互作用が展開されて子どもの自己や心が発達していくのです。

赤ちゃんと対面すると思わずしてしまうことが、結果的には発達に良いということですが、子育てがうまくいかないという父母がたくさんいるというのも事実です。なぜ親子関係に違いというものが生じてくるのかという事について少し考えていきたいと思います。

愛着の個人差と養育環境

子どもは自分の要求を十分受け入れてくれない親であった

としても、最低限自分が安全だという感覚を得ようとしています。そのために、親の関わり方に応じて自分のくっつき方を調整しなくてはいけなくなり、そこに個人差が生じてくるのです。養育環境の質や養育者の感受性というものが、愛着に個人差をもたらすのです。

― 愛着のタイプ ―

Aタイプ (回避)	子	養育者との間に距離をおいている 愛着のシグナルを最小限に留め安心感を保持
	親	拒絶的 子どもが近づいていることに対して否定的な感情を持つ
Bタイプ (安定)	子	養育者との関係が安定している
	親	応答的
Cタイプ (アンビバレント)	子	養育者にしがみついていることが多い 愛着のシグナルを最大限にし安心感を維持
	親	気まぐれ 一貫性が乏しい いつどこに行くのかわからない
Dタイプ (無秩序)	子	うつろ 不可解な行動
	親	抑うつや虐待

養育環境の中で、子どもにとってベストなのは全面的にくっついて安心感に浸ることで、それができない場合は、その養育環境に応じてくっつきの状態を維持しようとしています。最近注目されているのがDタイプで虐待をうけている子どもが非常に多いということです。さらにDタイプには二つのタイプがあるので。

生後12ヶ月から18ヶ月

D不安定	子	回避的であり不可解な行動
	親	自己中心 敵対性が強い
D安定	子	一見Bタイプ うつろ 行動が凍りつく
	親	不安・無力感が強い

2歳から

統制的タイプ (親への気づかい)	懲 罰 型	親を叱り付ける
	世話焼き型	親に過剰に世話をやく

抑うつ、虐待を想定すると、子どもは親の感情の崩れが自分に跳ね返ってくるので、親の感情を安定させるために大人のような役割を担ってしまうのです。



愛着の基本原則

子育てにおいて、的確に子どもの欲求や状態を読み取り反応していくこと、感受性というものが非常に重要視されてきました。このことは今も変わりはないのですが、最近は情緒的な利用可能性というものが、一番重要ではないかと言われています。情緒的な利用可能性というのは、子どもが求めてきた時に、親は子どもの求めに応じて何かするという、情緒的に利用可能な存在であればよいということであり、これが愛着ということの基本原則です。逆に言うと、子どもがシグナルを送っていない時に、あえて何もしないでいるという事が非常に重要だということです。

子どもとの関連性の基本

基本は子どもがシグナルを送ってきたら応える、情緒的に燃料補給して送り出し、子どもが一人でやっていることに土足で踏み込むことをしないということです。現実的に子どもに何の物理的な意味での助けはしていないが、例えば少し声を掛けるなど感情的に調律をしていくことによって、子どもは心理的な意味では支えられているという感覚を持ちます。しかし、物理的には自分ひとりでやっている、こういったことがとても重要です。

安全の輪とほどほどであること

子どもは安全な基地を拠点として、そこから出かけて行っているいろいろな活動をし、親はあえて動かずにいて見守ります。子どもは親が自分の活動を背後から見てくれているという感覚を持ちます。ここに行けば確実に保護してもらえる避難所であるということ、そしてここで燃料補給をして、また再び出て行けるという感覚です。重要なことは親はここにいて基地や避難所であることで、決して子どもの後ろをついて回ることをしないということです。

そして、親は完璧ではなく、子どもが納得するくらいにほどほどが良いのです。ほどほどであるからこそ、子どもは適度なフラストレーションを持ち、そのフラストレーションに対処するために自分からシグナルを送ることができます。シグナルを送ることによって現実には誰かが応えてくれたという自信を持つことができるのです。シグナルに応えてくれた人に対して信頼を持つこともできると同時に自分で気持ちを調整できたという自信にも繋がるのです。感情調節ということと自分に対する自信や他者に対する信頼、これが社会情緒的な発達の基礎なのです。

〔平成19年7月13日〕